U.S. Embassy Japan

# アメリカンビュー

アメリカ大使館公式マガジン

2020 ISSUE 01

日米安保条約改定60周年記念号

特集 | 日米同盟—ウィン・ウィンの関係を築く世界最高の防衛協定

AMERICAN VIEW

一巡した歴史：
在名古屋領事館100年のストーリー

月探査からその先へ
——宇宙における日米の連携

米海兵隊の第3海兵遠征軍と敬礼を交わす陸上自衛隊水陸機動団。「ヤマサクラ-77」合同訓練の閉会式での一コマ。2019年12月、沖縄県うるま市のキャンプ・コートニーにて撮影

共和、民主両党の大統領の下で駐日米国大使を務めたマイク・マンスフィールド（任期：1977～1988年）は、かつて日米同盟を「世界で他に類を見ない、最も重要な2国間関係」と評した。この有名な発言は信条となり、日米同盟関係を体現した条約は過去のどの条約よりも長く存続し、今なお日米両国に恩恵をもたらしている。

# U.S.-JAPAN ALLIANCE

ジェローム・ライアン

## 日米同盟―ウィン・ウィンの関係を築く世界最高の防衛協定

ホワイトハウスで話し合う日米両国の政府高官。前列左から、クリスチャン・ハーター国務長官、ドワイト・アイゼンハワー大統領、岸信介首相、藤山愛一郎外務大臣。後列左から、ジェイムズ・グラハム・パーソンズ国務次官補、駐日米国大使ダグラス・マッカーサー2世、駐米日本大使・朝海浩一郎。1960年1月19日 (AP Photo)

1960年1月19日、当時の岸信介首相とクリスチャン・ハーター国務長官が「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」に署名した。この条約は日本が攻撃された場合、日本を守るため、米国が日本に軍隊を配備すると定めた。また、「日本国の安全に寄与し、ならびに国際の平和および安全の維持に寄与するため」、日本の施政下にある領域内で米軍が港湾および軍事施設を使用できるとし、米国が直接の戦闘活動を開始する前に日本と協議することも約束した。60年を経た今、日本に駐留する米軍兵士は5万人を超える。日本の防衛と地域の平和・安定を維持しようとする米国の決意の表れである。

アイゼンハワー大統領が見守る中、日米安全保障条約に署名する岸信介首相。1960年1月19日、ワシントンDC (AP Photo)

日本にとって日米同盟は、国家の独立と国際舞台への復帰の象徴であった。日本は、比較的少ない防衛費で安全保障を手に入れ、それが地域における他国の領土拡張の野心を防ぐ効果的な防衛手段となった。日本はまた、米国の核の傘下で安全を保証されていたため、財源を経済復興に充てることもできた。日本の政策決定者や産業界は、当時世界の国内総生産(GDP)の30%近くを占めていた巨大な米国市場への参入を期待した。一方、米国財界の指導者たちは、日米同盟を広く支持し、域内の経済成長力を利用しようとした。現在、日米のビジネス関係はかつてないほど強い。これは両国が先ごろ締結した2国間貿易協定からも明らかだ。対日外国直接投資では、米国は依然として最大の投資国である。

日米同盟は、経済面・安全保障面において、双方に多大な恩恵を与え続けている。より広範の意味においては、その規模を考えると、世界全体に安定をもたらしている。

日米は条約締結直後から経済および安全保障における関係を深めた。その一方で、文化・教育分野の相互交流拡大からも恩恵も受けた。日本で学ぶ米国人留学生の数は着実に増えている。1952年、日本がフルブライト・プログラムの対象国となると、大勢の日本の若い知識人が同プログラムを活用し米国で学術研究に携わるようになった。非政府組織(NGO)、財団、そして大学も、文化・教育交流や民間レベルの交流を拡大した。

いかなる同盟もその強さが真に試されるのは、危機や軍事紛争の時であることは言うまでもない。日米同盟の場合は、2011年3月11日に発生した東日本大震災である。日本が地震、津波、原発事故という3重苦に襲われた時、この同盟の強さは1952年には想像もしなかった形で試された。米軍と自衛隊による前例のない規模の合同人道救援活動は、日米同盟が盤石であり、軍事的有事以外でも大きな価値を持つことを世界中の人々に示した。当時のオバマ大統領は震災直後、「この大きな試練の時に、米国は日本国民を支援する用意ができている。両国の友好および同盟関係は揺るぎなく、この悲劇を乗り越えようとする日本国民と共にあろうとする私たちの決意をさらに強めるものである」と述べた。

これまで何十年もの間、日米同盟は目まぐるしく変わる地域および世界各地の安全保障課題に応じて変化してきた。地球規模の問題で日本の役割が拡大するにつれ、日米同盟も拡大した。1990〜1991年の湾岸戦争では、日本の自動車運搬船が米国の装備品を湾岸地域に輸送し、日本は増税まで行い130億ドル近い戦費を拠出した。憲法上の制約で日本は湾岸戦争に自衛隊を派遣することができなかった。しかし1992年、国連の指揮下であれば自衛隊の紛争地域への派遣を将来的に可能にする「国連平和維持活動等に対する協力法案(PKO法案)」を可決した。以来、自衛隊はカンボジアや他地域での平和維持活動に携わってきた。さらにアフガニスタンで戦う連合軍に燃料を補給するため、海上自衛隊の補給艦をインド洋に配備した。

日米貿易協定の署名前に、安倍首相と握手を交わすトランプ大統領。2019年にニューヨークで行われた国連総会の会場にて (AP Photo/Evan Vucci)

21世紀に入っても、日米安全保障条約によって成文化されたこの地域における日米の指導的立場は、他の域内諸国からも支持された。当初、冷戦終結直後の高揚感の中、兵力を大

幅に削減することが検討されたが、日米がこの地域に安定した軍事態勢を維持する必要性が次第に明らかになり、実際に削減されることはなかった。この地域の最も差し迫った脅威は、核兵器で域内を脅かし続ける北朝鮮であった。2015年、日本の国会は日米同盟のさらなる強化に向け、集団的自衛権の行使を容認する法案を可決した。これにより、攻撃を受けた米軍への事実上の支援が可能となった。

日米両国の指導者は、日米安全保障同盟はインド太平洋地域の平和と安定の礎であると明確に表明してきた。こうした発言は日米両国の兵力の透明性と相まって、引き続き日本の国土を守り、北朝鮮のような危険な近隣諸国を抑止する上で役に立っている。日米同盟はまた、米国が今後も北東アジアの長期的安定の維持に尽力していくという安心感を他のアジア諸国に与える役割も果たしている。過去60年、日米安全保障条約は時の試練に耐えてきた。日米安全保障協力体制は、冷戦時のソビエトの拡大主義に決して屈することはなかった。そして冷戦時代から抜け出した日米は、もはや2極体制という言葉では明確に定義できないあいまいな世界で日米同盟がいかに重要であるかを痛感した。域内の安全保障課題が目まぐるしく変わる今日、日米同盟はかつてないほど強く重要なものとなった。

広く見れば、日米同盟は日米が共有する民主主義、自由市場資本主義、そして普遍的な人権に対するビジョンと決意を通して、インド太平洋地域に安定、平和、繁栄をもたらすものだ。軍事的有事の有無にかかわらず、米軍と自衛隊が相互に強化し合う関係は、これからも域内の侵略を抑止し続ける。そうした枠組みの中で、日本、米国、そして他のアジア諸国は、特に自由貿易や通商など、安全な環境が提供する全ての恩恵を自由に享受している。元米国国防次官補のジョセフ・ナイは1995年、「安全保障は酸素のようなものであり、必要になるまでその存在を意識することはあまりない」と簡潔に表した。民主主義国にとって、危機や紛争を防ぐ予防策を平時に取ることは決して容易ではない。しかし、日米同盟の存在自体が多くの侵略行為を抑止し、多くの安全保障上の危機を未然に防いできたことは明らかだ。日米同盟は今後も、日々この役割を果たし続けていく。

宮城県気仙沼市の赤ちゃんにテディベアを手渡す米海軍のヘリコプター・パイロット。2011年の東日本大震災後に実施された「トモダチ作戦」では、地震や津波の被災者に米軍から援助物資が配給された (AP Photo/Eugene Hoshiko)

**ジェローム・ライアン**

在日米国大使館政治部で1等書記官を務める。2004年に米国務省入省。東アジア地域を専門とする。駐大阪・神戸米国総領事館、在韓国米国大使館、在香港総領事館での勤務経験があり、政治・経済・金融問題に携わった。



COUNTRY ARTIST

# CHARLIE NAGATANI

## 「素朴、真心、哀愁」—60余年をカントリーに捧げたチャーリー永谷

写真上・下：カントリーゴールドで演奏するチャーリー永谷＆キャノンボール

**20**歳になる前日のことである。永谷正輝は近所の友人から、カントリーミュージックのカバーバンドによるライブコンサートをプレゼントされた。弦楽器が奏でる陽気な音と魂を揺さぶるような歌詞は、その後に彼が進む方向を決定付けた。64年後の現在、ライブハウス「グッド・タイム・チャーリー」のオーナーであり、名高いカントリーミュージックの祭典「カントリーゴールド」の陰の立役者となった「チャーリー永谷」は、日本のカントリーミュージック界の巨匠として知られている。

米空軍太平洋音楽隊「パシフィック・トレンズ」のステージ

アメリカン・ビューは永谷とのインタビューで、20歳の誕生日の翌日に大学を中退し、誕生日会で演奏していた「ヒルビリー・ジャンボリー」と電車に乗り、故郷を後にした理由を聞いてみた。答えを考える間、永谷はあごひげを触り、メガネをかけなおし、時には鼻唄を歌っていた。そして、ひじをテーブルに載せ、指でトントンとリズムをとりながら、「素朴、真心、哀愁」という3つの言葉をあげた。これこそが、朝から晩まで聞いても決して飽きることのないカントリーミュージックの神髄を表していると言う。

しかし、両親は永谷の情熱を受け入れられずにいた。そんな馬鹿な夢はあきらめて、学校に戻るよう彼に懇願した。しかし、永谷は聞き入れなかった。「絶対にやめない。生きている限り歌い続ける」と固く心に誓った。

彼は自分の誓いを守った。その後20年間、日本各地の米軍基地をはじめ、グアム、フィリピン、台湾で演奏活動を行った。米軍兵士から「チャーリー」と呼ばれるようになったのは、このような初期のツアー中である。このニックネームは定着し、1961年に故郷の熊本に帰ると、自分のバンドを結成しようと心に決めた。

永谷のバンド「チャーリー永谷&キャノンボール」には、結成以降、総勢82人が参加している。「グランド・オール・オプリ（テネシー州ナッシュビルで行われるカントリー・ミュージックのライブ放送番組）」には29回出演。カントリーミュージックのファン層を広げようと熱心に取り組んだ。「一度聞けば、誰もがカントリーミュージックを絶対に好きになるから!」と、永谷は言う。

しかし、地元で有名になるまでの道のりは厳しいものだった。「カントリーミュージックで食べていくのは簡単なことではなく」、演奏を続けるため、ツアー中は何度も友人の世話になった。しかし、

カントリーゴールドのステージ前でラインダンスを披露するダンサー達





自分を疑ったことは「一度もない」。「こんなことができるのは、私のような変わり者だけ」と話す。

1976年、ついに彼の決意が実を結ぶ。熊本初のカントリーミュージック専門ライブハウス「グッド・タイム・チャーリー」をオープンさせたのだ。入りやすくフレンドリーな雰囲気の店の木の壁は、友人たちからの手紙やカントリーミュージックの思い出の品々、有名アーティストのサインが入ったカントリーミュージック関連ポスターなどで埋め尽くされている。永谷のアメリカ文化への愛情は、「グッド・タイム・チャーリー」だけでなく、偉業になりえるプロジェクトにも注がれた。

日本のカントリーミュージック界の巨匠チャーリー永谷

1989年、永谷は阿蘇山のふもとでカントリーミュージックの祭典「カントリーゴールド」を初開催し、8,000人の観客を動員した。カントリーゴールドは、日本にカントリーミュージックを広めたいという永谷の情熱が実を結んだものである。

ウエスタン衣装に身を包んだ来場者の楽しみは、永谷の音楽だけではない。アメリカ人アーティストや地元バンドの演奏も人気を博した。阿蘇山を一望する広い野外ステージの前では、ラインダンスのパフォーマンスも行われた。おそろいの衣装にカウボーイブーツをはいたダンサー達が、音楽に合わせて足踏みやターンをし、リズムを刻んだ。

永谷は昨年、30年間の集大成となる「ファイナルアンコール」に全身全霊を注いだ。しかし、これが終わりというわけでない。はつらつと歩く姿に、84歳という年齢は感じさせない。カントリーゴールドはフィナーレを迎えたが、永谷の伝説に終わりはない。

永谷が取り組んできた草の根レベルでの日米交流への貢献に対して、一般社団法人日米協会は「第3回金子堅太郎賞」の受賞者に彼を選出した。今後も永谷は、熊本市民会館で小規模の屋内音楽祭「カントリーサンシャイン」を続けていく。「生きている限り歌い続け、カントリーミュージックの真髄を分かち合っていく」という約束をこれからも守っていくつもりだ。

# 月探査からその先へ

## ―宇宙における日米の連携

*Missions to the Moon*

「ゲートウェイ」と月探査宇宙船「オライオン」のイメージ図（NASA）

国際宇宙ステーション（ISS）計画で20年以上に及ぶパートナーシップを構築した米航空宇宙局（NASA）と宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、カナダ、ロシア、ヨーロッパの宇宙機関と共に、月軌道を周回する「ゲートウェイ」という小型宇宙船を開発しています。

JAXAは「こうのとり」という名の無人宇宙ステーション補給機を開発した。イラストは、メキシコのバハ・カリフォルニア州から約500キロ西の太平洋上に位置するISSに搭載されているロボットアーム「カナダアーム2」から切り離された直後の「こうのとり7号機」（NASA）

ゲートウェイは、月面での人類の活動をサポートし、将来的な火星探査に向けた経験を提供していきます。

2019年9月、東京で行われた会合で、ジェームズ・ブライデンスタインNASA長官と山川宏JAXA理事長は、現在実施されている両機関の取り組みを歓迎しました。この取り組みは、NASAの「アルテミス」計画にJAXAが参加し、日本人宇宙飛行士が月探査に参加するビジョンを実現するものです。

ゲートウェイが主要な役割を果たすアルテミス計画により、2024年までに女性初の月面着陸と男性による再着陸を目指します。JAXAは、人類の月面での活動を支援するロボットミッションで協力しています。日本は、インド宇宙研究機関との共同研究によるデータを応用するほか、トヨタ自動車と月面車の共同研究を行い、

ジェームズ・ブライデンスタインNASA長官、山川宏JAXA理事長、および奥地弘章トヨタ自動車執行役員の会合が、2019年9月25日に大使公邸で行われた

この計画で使用する月面探査車を開発すると報じられています。さらに、日本の新型H3ロケットでゲートウェイに運ばれるJAXAの無人新型宇宙ステーション補給機（HTV-X）が、給油と物資補給任務に使用されます。

恒星、準星、ブラックホールから放射されるX線を調査するため、2021年初めに始まるX線分光撮像衛星（XRISM）計画では、両宇宙機関の役割が入れ替わります。JAXAが計画を主導し、NASAは主要機器を提供します。NASAはまた、月から火星に向けての広範な探査目標の一端として、JAXAの火星衛星探査計画（MMX）で火星の衛星まで飛行する主要機器を開発しています。

宇宙ミッションに関する日米の有意義な協力は、基礎研究と技術開発の力となり、次世代に刺激を与える役割を果たし、人間とロボットによる共同探査の取り組みを前進させます。

ジョセフ・M・ヤング駐日米国臨時代理大使

月面での有人着陸システムを描いたイメージ図（NASA）

は10月1日付日本経済新聞に寄稿し、両国共通の目的は有人宇宙飛行、地球・宇宙科学、航空宇宙工学での日米連携や将来の意欲的な宇宙探査計画だとし、「日米同盟は地球、月、火星、そしてその先で、両国のさらなる偉業を達成するための力である」と述べています。

またヤング臨時代理大使は、日米両国は安全保障領域としての宇宙で緊密に連携する必要性も認識していると指摘しています。実際、2019年4月に行われた日米安全保障協議委員会（SCC）で外務・防衛担当閣僚は、宇宙は日米同盟が領域横断作戦にしっかり備えるための優先分野であると強調しました。

ドナルド・トランプ大統領は2019年5月27日、東京で行われた安倍首相との共同記者会見で次のように述べています。「安倍首相との間で、有人宇宙探査における2国間協力を劇的に拡大することに合意しました。我々は月に行き、そう遠くない日に火星にも向かうでしょう。心が躍ります。軍事的見地から見ても、今ほど宇宙の重要性が高まったことはありません」

# 巡した歴史

Consulate Nagoya Centennial

## 在名古屋領事館100年のストーリー

在名古屋米国領事館
首席領事
**ゲーリー・シェイファー**

1920年当時の名古屋米国領事館と、跡地に立つシェイファー首席領事

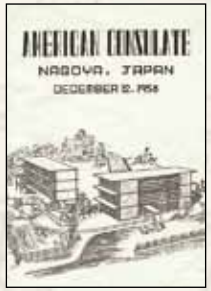
ハリー・ホーリー領事と妻のアグネス

今年名古屋では日米関係において新たな節目を迎える。7月3日、在名古屋米国領事館は開設100周年を祝う。1920年7月3日、新米の外交官が名古屋駅近くの2階建ての簡素な建物に星条旗を揚げ、当館は正式にオープン。その後、日本の製造業の拠点かつ最大の港として発展してきた名古屋の歴史と重ね合わせるように、街の驚異的な成長を反映する一方その下支えにもなった。今日、初代領事館は姿を消し、現在の職員は高層ビルで働いている。だが、名古屋とアメリカがこの100年で築いた絆はかつてなく強い。

現在の名古屋からすると、アメリカがこの街に領事館を置くことは当然のように思える。愛知県は製造品出荷額で43年連続日本一であり、名古屋港も総貨物取扱量で18年連続首位だ。しかし昔からそうであったわけではない。名古屋が工業の中心地として台頭したのは19世紀のことだ。原動力となったのは繊維業と陶磁器業だった。しかし、名古屋の海は水深が浅かったため、生産品を外国に輸出するには伊勢湾対岸の四日市港まで荷物を運び、そこで外航船に積み替えなければならなかった。当然ながらアメリカは、中部地域において初となった外国公館を名古屋ではなく四日市に置くことにした。1909年に開設された「四日市米国代弁領事館」は小規模で、担当は名古屋に住むアメリカ人宣教師が臨時で務めた。輸出企業に「領事送状」という税関関連の書類を発行することが主な業務で、電車で四日市まで通っていた。

その後の10年間で、アメリカとの貿易が活発となり、名古屋港が浚渫され世界の玄関へと生まれ変わると、当館を取り巻く状況も一変した。1919年、ハリー・ホーリー領事は、領事館を四日市から名古屋に移す命を受けた。1880年生まれのホーリーは、37歳にして外交官としてのキャリアに乗り出した転職組だったが、出遅れた分、実に粘り強かった。5年以上名古屋に滞在し、歴代領事の中で最も任期が長い。前職は政府役人付きの速記者として世界各地に赴任し、マニラ、上海、東京にも勤務したことがあった。1920年7月3日、領事として採用されて

ナショナル・シティ・バンク・オブ・ニューヨークのオフィスビル。アントニン・レーモンドの設計



1958年に完成した新しい領事館ビルと当時のパンフレット

からわずか3年後、ホーリーは東区役所に隣接する2階建ての洋館に名古屋領事館を設置した。記録によると、建物は市から借り受けたもので、賃料はなんと150円!

ホーリーは1925年まで領事を務め、今日に至るアメリカと名古屋の緊密な経済関係の礎を築いた。1937年に開催された日本初の万博「名古屋汎太平洋平和博覧会」では、急速に拡大した名古屋とアメリカの貿易にスポットが当てられた。ダラス、ロサンゼルス、ニューヨークなどアメリカの主要都市が参加し、それを称える証として主催側は1937年4月24日を会場で「アメリカ・デー」として祝った。

領事館は太平洋戦争開戦前年の1940年に閉館となったが、1951年のサンフランシスコ講和条約調印直前に名古屋の中心部、栄で再開した。その翌年、初代帝国ホテルの設計に携わったフランク・ロイド・ライトの弟子で、アメリカ人建築家のアントニン・レーモンドがデザインしたナショナル・シティ・バンク・オブ・ニューヨーク（シティバンクの前身）のオフィスビルの2階に移転した。ガラスとコンクリートの超現代的な建物で、戦後の前向きな時代精神を象徴した外見だったとも言える。この頃、名古屋にアメリカ第5空軍司令部が置かれたため（1946～1957年）、領事館は日米同盟を支えるという重要な役割を新たに担うことになった。

1950年代後半から1960年代にかけて、名古屋は急成長を遂げた。領事館もこの名古屋の驚異的な発展に負けじと存在感を増した。アメリカ政府は中区に職員宿舎を兼ねた3階建ての専用ビルを建て、7人の外交官が勤務した。1958年12月12日の開設式典には東京から駐日アメリカ大使ダグラス・マッカーサー 2世も駆けつけた。しかしその12年後、街も領事館も大ピンチに。石油ショックと通貨危機で名古屋経済が低迷する中、領事館は予算削減のため1970年に閉鎖された。

領事館は現在、名古屋国際センタービルの6階にある

1980年代後半、さまざまな動きから貿易・投資のパイプ役としての領事館の価値に注目が集まり、領事館が復活する運びとなった。日本の自動車メーカーとして本田技研工業が初めてアメリカに生産拠点を設置してから4年後の1986年、大阪・神戸米国総領事館の副領事が名古屋に出向し、その後1993年に在名古屋米国領事館が復活した。開設式典には元副大統領のウォルター・モンデール大使が出席した。現在の領事館は名古屋国際センタービルの6階にあるが、ここへ移転したのは、名古屋にとっても歴史的な年となった2005年のことだった。同年、環境をテーマにした「愛・地球博」が開幕、6カ月におよぶ開催期間中2200万人が全世界から来場した。

在名古屋米国領事館は、市内の外国公館の中で一番歴史が長い。これは、日米が特別な絆で結ばれている表れであると言っても過言ではない。ちなみに、次に古いのがポルトガル名誉領事館（1921年設置）で、オランダ（1925年）、アルゼンチン（1928年）と続く。100年も存続した当館のことを、アメリカによる名古屋への長期的な投資と私は捉えている。時代によって日米間を繋ぐ人、モノ、アイディアは変わるとしても、その投資は相互理解と繁栄という貴重なリターンを一貫して生み出しているからだ。現在、名古屋経済のけん引役は繊維業から自動車産業へ変わった。（トヨタの関連会社が今でも織機を製造しているが。）また、自動車関連産業と航空宇宙産業におけるアメリカと名古屋のパートナーシップは、太平洋を挟んだ双方で雇用と利益をもたらしている。さらにもう一つ誇るべきことは、当館に赴任した外交官が、その後米政府の幹部へと出世していった事例が驚くほど多いことである。現役外交官だけを挙げても、在京米国大使館の報道官と政治担当公使参事官として、さらには駐コソボ大使として活躍している。これはひょっとすると「みそカツ」のパワーのお陰かもれしれない!

領事館では現在、懐かしい話や思い出の品を集め、他の楽しい記念日同様に、100周年を祝う準備を進めている。そんな中、忘れられない出来事が最近あった。テキサスの骨董品店がインターネットオークションに、ホーリー領事の妻が書いたハガキを出品しているのを私は偶然見つけ、しかもそれを購入できたのだ。名古屋からアメリカに郵送された1枚のハガキが、100年の時を経て名古屋へと戻ってきた。これを受け取った瞬間、100周年を迎える領事館の素晴らしいストーリーが一巡したような気がした。

ホーリー領事の妻が書いたハガキ

# コーヒーとドラゴンボートで相互理解を深めるアメリカと沖縄

# Coffee and Dragon Boats

米軍基地で働くアメリカ人と沖縄の住民が英会話を練習中。地元カフェでの一コマ

早朝のカフェ。そこには万国共通の光景が広がる。ラップトップのキーボードを打つ人。スマホ画面を指でスクロールする人。静かに話している人。それぞれがお気に入りのドリンクを片手に穏やかな時間を過ごしている。ところが沖縄のカフェでは、少し活発な雰囲気に遭遇する可能性がある。異なる文化的背景を持った人たちが長テーブルを囲み楽しそうに会話していたり、軍服を着た若いアメリカ人と地元の人が、カフェの一角に集まり英語でおしゃべりをしているといった具合だ。これは県内各地で見られる朝の光景だ。

これは何だろうと不思議に思うかもしれない。朝８時前に楽しく過ごしてはいけないというルールがあるわけでもないだろう。ではどのようにして、カフェにいたアメリカの軍人は地元の人と仲良くなったのか。

朝のカフェで行われていたのは、在沖縄アメリカ総領事館が主催する「朝活英会話教室」、通称「朝活」だ。2010年に始まり、米軍基地で働くアメリカ人と英語を勉強したい地元の人たちが集まる。沖縄の人たちは、基地で働くアメリカ人と定期的に交流を持つことで、アメリカ人を個人として知り、アメリカという国を理解するようになる。アメリカ人にとっても沖縄の文化を知り、地元の人と直接話す機会となる。

基地のアメリカ人と会話を楽しむ沖縄の住民。北谷町のコーヒーショップにて

読谷村の参加者は、「アメリカ人と日本人の参加比率は半々で、朝活はさまざまな経験がある他の日本人とも出会える場」と話す。また

グッズを手にしてロックバンド「アスキング・アレクサンドリア」の到着を待つ地元ファン。コンサートは2018年3月24日のキャンプ・シュワブ・フェスティバルで行われた (撮影：米海軍伍長ダニエル・プレンティス)

別の参加者は、朝活に参加し始めたころは英語が口から出てこなかったと言う。今は自分なりに上達していると実感しており、参加するととても楽しいので、絶対続けようと思っていると話す。

朝活はカジュアルな形からスタートした。2010年のある日、領事館に勤めるアメリカ人職員が地元の人たちとカフェに集まりコーヒーを飲みながら英会話をしていたのがきっかけだ。教科書もレッスンプランもなく、名札も予約も必要ない。ただ気軽に会話をするだけ。それから朝活は次第に大きくなり、今では県内5カ所で月に10回開催されている。場所の世話は軍の各部隊の代表者が行い、基地職員に参加を呼び掛ける。

在沖米海軍艦隊活動司令部で渉外官として働く古田映紗は、「朝活は今まで互いに交流を持ったことのない地元住民とアメリカ軍人が、英会話を通して個人的な関係を築く場。このような交流の場が日米パートナーシップの強化につながります」と話す。

朝活をきっかけに別の活動も生まれている。その一つが、地元住民が夕方にアイスクリームショップに集まり基地のアメリカ人と英会話を楽しむ「夕活」レッスンだ。また、朝活参加者はビーチバーベキューなどのイベント企画のために、メッセージアプリで連絡を取り合っている。

沖縄の人たちが在日アメリカ軍を活用して英語力を磨く別のプログラムもある。メリーランド大学グローバルキャンパス（UMGC）が運営する「ブリッジプログラム」だ。このプログラムは5つのコースからなり、授業は基地内キャンパスで行われる。基地がある自治体の学生の英語力を強化し、アメリカの大学への進学をサポートし、欧米の大学のスタイルになじむための準備を行う。那覇の総領事館は毎年10人の学生をサポートする。授業料を提供し、受講者の上達度合いをしっかりフォローする。受講後に多くは、アメリカの大学への進学を希望する。

「ブリッジプログラムは、沖縄と駐留アメリカ軍の双方のためになります」。プログラム責任者のジャッキー・シリッザはこう話す。「沖縄の学生は地元にいながらアメリカの大学で勉強することができ、プログラム終了後には多くの学生がUMGCに通うアメリカ軍人と一緒に正規クラスを受講しています。軍人はブリッジプログラムを通して基地とは関わりがない地元の人々と出会う機会が得られます。一方で地元の人たちも、軍人と個人的な交流を持つことができます」

ジェイソン・ペリー大佐率いるキャンプ・シュワブ・チームが、辺野古で行われたハーレー大会に参加した。2019年5月12日

沖縄の人たちは県内に駐留するアメリカ軍と、教育面だけでなくあらゆる場面で親交を深めている。キャンプ・シュワブ第4海兵連隊司令官のジェイソン・ペリー大佐は、基地は多くのイベントを開催していると話す。「クリスマス、イースター、キャンプ・シュワブ・フェスティバルなどに私たちは地元の人たちを招待しています。シュワブ・フェスティバルは、バンド演奏やゲーム、アメリカ料理を出す屋台などで賑わう大イベントです。毎年多くの来場者があり、皆楽しんでくれています」

ペリー大佐にとって地元の人たちとの交流は自然なことだ。彼の父親はノースカロライナで空手道場を経営しており、大佐は物心つく前から空手を習っていた。父親は1964年に海兵隊員として沖縄に駐留し、一心流を稽古していた。大佐は19歳の時に来日してから日本各地に住み、流暢な日本語を話す。

ペリー大佐は第4海兵連隊の司令官になったとき、辺野古区長からキャンプ・シュワブを辺野古区第11班に認定する旗を受け取ったと説明してくれた。「私たちと辺野古の人たちの関係は、どこの地域にもある付き合いです。私たちは地元の人たちと頑張って関係を作ろうとしているのではありません。既に辺野古の一員なのです。ハーレー大会（ドラゴンボートと呼ばれる手漕ぎ船を漕いで速さを競う大会）があれば辺野古区第11班として「のぼり」を掲げ参加します。もちろん、沖縄角力（沖縄の伝統相撲）の大会もです。私たちはお客さんではなく地域の一員であり、お互いのためになるような関係を築いています」

カフェでの英会話レッスンやハーレー大会。どんな場であれ、アメリカ人と沖縄の人たちは頻繁に交流し、いろいろな形で相互理解を深めている。そうすることで、互いの生活の価値を高め、日米同盟の土台となる人と人との絆を強めているのだ。

# Sister Cities

# エリザベス市との姉妹都市提携50周年を祝う北見市

ピアソン記念館

北海道北見市とニュージャージー州エリザベス市の間には、50年にわたる姉妹都市としての歴史がありますが、両市の絆の始まりは、2人のアメリカ人宣教師が北見に居を定めた20世紀初頭にまでさかのぼることが出来ます。

北見市が開拓して間もない時代、開拓者たちの精神的かつ道徳的な礎となり力となったのが、ピアソン夫妻の宣教活動です。ジョージ・ペック・ピアソンは、ニューヨーク近郊の川沿いの都市ニュージャージー州エリザベス市で生まれ、1888年に宣教師として来日しました。1894年には北海道に渡り、北海道の開墾・開拓に苦労している人々に熱心に語りかけています。

1895年にアイダ・ゲップと結婚、1914年には夫婦で北見に移り住みました。坂本龍馬の甥である坂本直寛が率いる四国高知からの北光社開拓移民団キリスト教集落があったことから、ピアソン夫妻は北見を北海道最後の活動拠点と定めたのです。

夫妻は楡や柏が生い茂る小高い丘の上に、スイスの山小屋風木造2階建ての「ピアソン邸」を建てました。

ピアソン夫妻

設計者は、当時の洋館設計の第一人者ウィリアム・メレル・ヴォーリズです。北見市は1970年に私邸を記念館として復元し、翌年にはピアソンの遺品や活動を紹介する「ピアソン記念館」として開館しました。記念館前の通りは「ピアソン通り」と命名され、多くの市民に親しまれています。

ピアソン夫妻の日本での伝道活動は、実に40年におよびました。そのうちのほぼ15年間を北見で過ごしたのです。1928年5月10日、北見の人々に慕われ尊敬されたピアソン夫妻は、宣教師の任務を終えて帰国の途に就きました。出発の日には大勢の人々が北見駅に集まり、賛美歌を合唱しながら夫妻を見送りました。ピアソンは最後に、「これで私たちが住む遠いアメリカを見てほしい」と言って望遠鏡を託し、涙で別れを惜しみました。その望遠鏡は現在、ピアソン記念館に保存されています。

ピアソンの偉大さは、今日の北見市民の心の中に脈々と受け継がれています。

## これまでの交流

このように、北見市とピアソンの出身地であるエリザベス市との間には、長年にわたる歴史的かつ精神的なつながりがありました。1969年6月12日に両市の間で、さまざまな分野の交流を通じて友情と相互理解を深め、ひいては世界の平和と繁栄

1996年北見市青年ジェット訪問団の
エリザベス市訪問。
前列一番右が畠一雄さん

に寄与するために、姉妹都市提携が締結されました。

周年時や開基年は、両都市において訪問団の派遣や受入が行われています。1976年には北見交響吹奏楽団のエリザベス市訪問演奏が実現しました。北見市青年ジェット訪問団のエリザベス市派遣は過去5回にわたって実施されているほか、幼稚園児同士の絵画作品交流なども行われてきました。

畠一雄さんは、1996年の北見市青年ジェット訪問団16人の一員として、エリザベス市を訪れました。歴史のある市庁舎だけでなく、街並み全てが印象に残ったと話します。帰国後は、北見市でエリザベス市の良さを紹介する活動を続けています。エリザベス市の友人を北見市に迎えることもできました。現在はSNSがあるため、お互いの近況を簡単に知ることができます。遠く離れていても友情は続いていくのです。「これからも、エリザベス市と北見市の魅力をお互いに紹介し続けます」と、畠さんは語ります。

辻綾子さんは、2012年と2014年の2度エリザベス市を訪問し、料理教室を開催しています。2019年10月には、姉妹都市提携50周年記念北見市訪問団の一員として、再度エリザベス市を訪問し、3度目の料理教室を開催しました。今回も現地の職業実践高校の料理部の生徒たちに料理を教えました。日本の料理文化を体験してもらうため、これまで彩寿司やきんぴらごぼうなどの和食を作ってきましたが、今回はおにぎりや卵焼きなどが入ったお弁当作りに挑戦しました。「今回もとても素敵な交流となりました」と、辻さんは話します。辻さんの願いは、エリザベス市民に日本の家庭料理の魅力や野菜ソムリエとしての活動を広めることと、エリザベス市の若者が、将来北見で食を通じて働くための環境整備です。また、将来の料理教室の開催も楽しみにしています。「今後ともエリザベス市の方々に日本の家庭料理やオリジナルレシピを紹介していきたいと思います」と、辻さんは話します。

エリザベス市の高校で行われた
辻綾子さんの日本料理教室。2019年10月

エリザベス市内の学
校を訪問する北見
市訪問団のメンバー

## 姉妹都市提携50周年記念事業

ピアソン夫妻の帰国から92年。北見とエリザベスの両市は大きな発展を遂げています。
姉妹都市提携50周年を迎えた昨年、北見市では一連の記念事業を行いました。親善交流の継続を図ることにより、市の次代を担う若者の国際感覚育成を目指しています。

両市では記念式典が行われ、市長を含む代表団による相互訪問が実現しました。昨年7月には、北見赤十字病院とエリザベス市のトリニタス・リージョナル・メディカルセンターの間で、医療連携確認書への調印が行われました。また10月には、北見工業大学とユニオンカウンティカレッジが国際交流協定を締結し、学生交流を進めることに同意しました。

市民レベルでは、ピアソン記念館でのグリーンコンサートや、専門学校の生徒によるピアソン宣教師とアイヌ文化との関わりを紹介した動画作成などの芸術・文化交流が行われました。また、幼稚園児の作品交流やエリザベス市からの英語指導助手（ALT）の招へいなど、教育分野での交流も実現しています。行政と市民が一体となった記念事業への取り組みにより、ピアソンが残した大きな功績を振り返るとともに、これからの交流がいっそう発展することが期待されています。

J・クリスティアン・ボルウェッジ・エリザベス市長は、「北見市との姉妹都市提携は、地域社会の強化につながる異文化体験を通じて、両都市の市民が関係を深め視野を広げる絶好の機会」と述べています。また、クリシュナ・ガーリック・エリザベス市保健福祉部長は、「姉妹都市訪問の調整役であることをとても光栄に思います。特に今年（2019年）は姉妹都市提携50周年を祝う重要な年です。両都市で行う予定の素晴らしい祝賀行事を楽しみにしています」と、コメントを寄せています。

# Holy Family Home and Gentle Wolfhounds

## 70年にわたり大阪の子どもを支援した「やさしい狼犬部隊」

ヒュー・オライリー軍曹

1949年暮れのある日、アメリカ陸軍のヒュー・オライリー軍曹は、十数人の兵士を引き連れ赤十字ボランティアと一緒に、大阪の児童養護施設で開かれたクリスマスパーティに出席しました。そこで目にしたのは、あばら家のような建物に暮らす栄養失調の子どもたちでした。オライリーはこの光景を生涯忘れることはありませんでした。

オライリーはすぐに、子どもたちを助けなければという思いに駆られました。これをきっかけに生まれたのが、「ウルフハウンズ（狼犬）」と呼ばれたオライリー所属の第25歩兵師団第27歩兵連隊と「聖家族の家」との交流です。この関係は70年以上たった今も続いています。

聖家族の家は戦争孤児、親に捨てられた子ども、家出した子ども、困窮している女性や高齢者のための施設として聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会が設立したものです。1947年には児童福祉法に基づき児童養護施設となりました。しかし戦後の混乱が続く日本には、児童養護施設を支援する財源はほとんどありませんでした。

オライリーは当時3回目の兵役中でした。太平洋戦争の敵国であった日本を嫌悪していたことから、日本への配属は希望していませんでした。しかし軍の命令で、「ウルフハウンズ」の広報官として占領下の日本に赴任することになりました。

聖家族の家への訪問はオライリーに、「稲妻が走った」ような衝撃を与えました。当時第27歩兵連隊で大隊司令官を務め、オライリーをよく知るドリュー・マイヤロウッチはこう話します。この訪問をきっかけに、オライリーは日本人を敵ではなく一人の人間として見るようになったのです。

「オライリーの話で一番忘れられないのは、栄養不足のため子どもたちの髪の毛に触ると途中で切れてしまったということです。また、手はしもやけがひどく、触れると痛そうな声を出していました。靴も履いていませんでした。給排水の設備もなく、暖房もありませんでした」（マイヤロウッチ）

聖家族の家を訪問する駐大阪・神戸米国総領事館の外交官ら

子どもたちに囲まれるオライリー軍曹

「クリスマスの時だけ子どもたちにごちそうやプレゼントを届け、翌日には立ち去っていく考えにやるせない気持ちを覚え、これがきっかけで募金活動を始めようと思った」と語るオライリーの真剣なまなざしに心を打たれたと、マイヤロウッチは振り返ります。連隊は給料日に帽子を回し、その中に隊員たちが1ドルや2ドルを寄付しました。初回は143ドルの寄付金が集まり、これを元旦の朝に施設に届けました。それ以来、この活動は給料日の慣例となりました。また隊員たちは、休みの日に施設を訪れ、新しい住まいを建てる手伝いもしました。ウルフハウンズの支援は、連隊の朝鮮半島出兵後も途絶えることはありませんでした。

1951年、オライリーは連隊から異動となりました。その時に後任へのメッセージとして、雑誌「ニューヨーカー」の記者に次のように語っています。「何よりも大切なのは施設の子どもたち。ウルフハウンズの一員になるにはこの仕事が一番大切」

1957年には、新しい伝統がウルフハウンズから生まれました。毎年夏、聖家族の家の子どもを連隊駐屯地であるハワイのスコフィールドバラックスに招待し、南国の日差しの下でホームステイや観光などハワイの生活を楽しんでもらうプログラムを開始しました。翌年にはウルフハウンズから2人の「サンタクロース」が施設を訪

れ、子供たちにプレゼントを届けました。

聖家族の家で理事長を務める上利久芳はこう話します。「聖家族の家の子どもたちにとって、本当に特別な出来事です。ウルフハウンズからやってくる彼らは約10日間、子どもたちと一緒に居室で食事をします。また、観光地を巡り、さまざまなゲームに興じ、数多くのイベントにも参加します。一番のイベントは12月25日に行われる『兵隊さんと一緒のクリスマス会』で、子どもたち全員と全職員でクリスマスをお祝いします」

第27歩兵連隊の「ウルフハウンズ」という愛称は、1918年に連合国遠征部隊の一員としてシベリアに出兵しボルシェビキと戦ったことに由来します。一方で聖家族の家に寄せた支援から、「やさしいウルフハウンズ」と呼ばれるようになりました。戦地に行ってもウルフハウンズから施設の子どもたちへの支援が途切れることはありませんでした。このことが、戦場では容赦ないけれども戦火の巻き添えとなった一般市民には思いやりを持って接するという部隊の特徴が生まれたと、マイヤロウッチは話します。

聖家族の家で行われたウルフハウンズとの交流70周年を祝うレセプションの様子。写真中央の女性は、1枚目の写真でオライリー軍曹が抱きかかえている子どもと同一人物である。2019年12月

オライリーは大阪出身の日本人女性・侑子と結婚し、朝鮮戦争後に帰国しハワイに居を定めました。そしてウルフハウンズの近くにいることで、聖家族の家を支援する伝統が途切れることのないよう見守ってきたのです。連隊で昇進しリーダーになった若い兵士は、この責任ある仕事を全うしました。連隊の兵士とその家族を世話する侑子は、いつしか「ウルフハウンズのお母さん」と呼ばれるようになりました。

オライリーは2006年に亡くなりましたが、聖家族の家への支援活動は「ピース・ブリッジ」財団が引き継いでいます。現在施設には120人以上の子どもが暮らしています。この70年でウルフハウンズは2億2000万円の寄付金を集め、177人の子どもをハワイに招待しました。2015年には、高校生を対象とした短期語学研修プログラムを立ち上げました。聖家族の家の116人の子どもが、国際養子縁組でアメリカに渡りました。

かれん・ケリー駐大阪・神戸米国総領事は、ウルフハウンズから聖家族の家への支援の伝統は民間にも広がったと話します。「この半世紀、駐大阪・神戸米国総領事館の外交官や職員も聖家族の家を支援してきました。領事館は毎年クリスマスの時期になると、子どもたちにプレゼントを届けたり施設を訪問したりします。また年末に行う職員とその家族向けのパーティに、施設の子どもたちを招待しています。このような活動を通じて私たちは、施設の子どもたちの幸せとウルフハウンズとの親善の絆を拡大する機会を大切にしています」

上利はウルフハウンズと70年にわたって育んできた絆を「奇跡」と呼んでいます。時がたち日本は、世界有数の経済大国へと発展しました。財政支援に以前ほどの重要性はなくなってきましたが、相互交流など財政面以外の支援が大切であることは変わりません。ウルフハウンズが子どもたちに届けたのはお金だけではなく愛情。上利は、オライリーの言葉をこう振り返ります。



## 在日米国大使館 広報・文化交流部 アメリカンビュー編集部よりお知らせ

### インターン募集

広報・文化交流部では、写真撮影や記事の執筆など広報活動のお手伝いをしてくれる学生インターンを募集します。応募締め切りなど詳細についてはこちらをご覧ください。
http://amview.japan.usembassy.gov/about-amview

### ストーリー募集

アメリカや日米関係にまつわる皆さんのストーリーを記事にしませんか。アメリカ留学旅行中の新たな発見、日米間の架け橋として活躍している人の紹介など、皆さんがシェアしたいお話をメールで編集部（TokyoAmView@state.gov）までお寄せください。英語でも日本語でも受け付けています。

アメリカン・ビューは在日米国大使館 広報・文化交流部が発行するマガジンです。アメリカの文化や社会を日本の皆さんに紹介し、日米関係にまつわる問題や出来事を考察しています。本誌の送付を希望される学校や団体は、使用目的を明記のうえ下記のメールアドレスまでご連絡ください。ご意見・ご要望もお待ちしています。下記のアドレスにお送りいただくか、ウェブ版のコメント欄から送信してください。

連絡先
在日米国大使館 広報・文化交流部報道室 アメリカン・ビュー編集部
〒107-8420 東京都港区赤坂 1-10-5
E-mail　TokyoAmView@state.gov
WEB　http://amview.japan.usembassy.gov

＊本誌記載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。

Snapshot
2020 ISSUE 01

# 60周年を祝う日米同盟

日米両政府は1月19日、日米安保条約改定の60周年を共に祝いました。茂木外務大臣と河野防衛大臣が共催する記念式典が東京都港区の飯倉公館で開催され、不朽のパートナーシップを祝うために両国の政府関係者らが出席しました。

あいさつの中で安倍首相は、アイゼンハワー大統領と自身の祖父である岸首相との特別な絆に触れ、同様の絆が今日ではトランプ大統領との間に築かれていると述べました。

ヤング臨時代理大使はトランプ大統領の声明を代読し、両国の同盟は「米国、日本、インド太平洋、そして全世界の平和、安全、繁栄にとって不可欠なものとなりました」と述べました。

記念式典にはアイゼンハワー元大統領の孫であるメアリー・ジーン・アイゼンハワーさんと、ひ孫のメリル・アイゼンハワー・アトウォーターさんも出席し、両国の政府高官と共に鏡開きを行いました。

表紙の写真：呉港へ寄港中の米海軍潜水母艦「エモリー・S・ランド」の見学に招待された海上自衛隊。2020年1月23日撮影

編集・発行／在日米国大使館 広報・文化交流部 〒107-8420 東京都港区赤坂1-10-5
American View: amview.japan.usembassy.gov 在日米国大使館：jp.usembassy.gov/ja
ウェブサイト版では、記事の全文、イベントなどのビデオや写真、その他の情報もご覧いただけます。本誌記載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。